ドイツにおける FKK（裸体主義文化）の歴史

——ドイツ第二帝国からヴァイマル共和国までの時代を中心に——

平　井　昌　也

序

現在のドイツに，裸体主義という文化がある。それは全裸になっての野外活動などを指すが，実際にドイツに行けば，各地で裸の人たちの姿を目にすることがある。裸体主義を知らない人がその光景に遭遇すると，いささか驚くことだろう。もしかすると，破廉恥な印象を受ける人まで出てくるかも知れない。しかし，彼らの活動は単なる享楽的なものでは決してない。それどころか，ある一定の理念に基づいて行われている真面目な活動なのである。現在に至るまで，裸体主義（ヌーディズム）はドイツでひとつの思想を形成するものとして発展を遂げてきた。現下のドイツでは，裸体主義を実践することは文化活動のひとつだと捉えられている。それゆえ，裸体主義者（ヌーディスト）を「露出症」などの精神疾患者や変質者と同じ次元で語るならば，それは誤解と偏見に満ちた先入観に捕らわれてしまっている危険性があることを，最初に強調しておきたい。

裸体主義は長きにわたる歴史を有しており，その年月を通じて培われた確固たる思想が存在する。裸体主義の思想家によると，全裸になることは重要な要素だとされる。ただし，ヌードになることは重要であっても，それ自体は手段であって目的ではない。裸体主義者たちは全裸になることだけを楽しんでいる

のではなく，その目的は健全な余暇活動を行うことにある。

一体どうして，裸体主義者たちは衣服を身につけないのだろうか。そもそも裸体主義とは，どのようなものなのか。その疑問に答えるためには，19世紀にまで時代を遡って検証がなされなければならない。裸体主義の思想が形成される背景には，近代社会の成立がある。ドイツ国内で近代化がおし進められる過程において，人々はそれまで経験したことがないような難問に直面した。そこに，裸体主義が誕生した理由がある。その後，ドイツにおける裸体主義は独自の進化を遂げることになる。

裸体活動は放埒な戯れではなく，歴史ある文化だと述べた。それでは，裸体主義運動はどのような理念のもとに始められ，そして国民的な文化に育つまでいかなる歴史をたどってきたのだろうか。その疑問に答えることが本稿の目的であり，更にそこからドイツ文化の一断面を浮き彫りにしたい。

その前に，裸体主義文化の呼称について説明しておく必要があるだろう。裸体主義文化は，ドイツ語では「Freikörperkultur」と呼ばれる[1)]。「frei」は「自由な，解放的な」という意味の形容詞で，「Körper」と「Kultur」はそれぞれ「身体」と「文化」を意味する名詞である。「Freikörperkultur」はこれら三つの単語を結合させた造語であるが，ドイツではその頭文字をとった「FKK」という略称が使われることが多い。それゆえ，この用語を本稿でも必要に応じて使用する。

1　裸体主義の胎動

裸体主義の起源を求めるためには，何をもって裸体主義とするかの定義づけが必要になる。中世を起源とする説もあるが，その定義を単なる水浴だけに限定するなら，古代ローマ帝国時代にまで遡ることができる[2)]。しかし，ドイツにおける現在の裸体主義文化に通じる思想が構築されるのは，19世紀末以降のことである。20世紀への転換期に，ドイツの裸体主義は思想と実践の両分野にお

いて大きな飛躍を見せ，この時期は裸体主義文化の萌芽期だと言える。そこで，この時代の社会状況を追うことにしたい。

1871年ドイツに第二帝政が誕生すると，近代化に向けた動きが加速して，工業化と産業発展，それに伴う大都市化などの現象が起こった。鉄鋼業を例にとると，ドイツの鉄鋼生産量は，この時期にイギリスを追い抜くまでに成長した。それによって，国民全体における鉄鋼業部門の就業者は農林業部門のそれを凌ぐまでになった[3)]。こうして，ドイツはダイナミックに変化しながら新しい世紀を迎えることになる。

19世紀末から20世紀の初頭にかけて，ドイツは政治だけではなく，社会・経済などの領域でも変貌を遂げる。そのことは国民を取り巻く環境に大きな影響を及ぼし，とりわけ都市に住む人々の生活環境を一変させた。都市部での大きな変化の一つに，爆発的な人口増加があった。産業化が進んで数多くの工場が都市部に建設されると，多勢の人が工場労働者の職を求めて，当時延伸された鉄道を利用して都心へ流入した。少し時代はくだるが，ベルリンを例にとると，その人口は1910年代には207万人であったものが，20年代には402万人に増加した[4)]。大都市化が進むと，工業化による環境汚染に加え，都市部に特有な問題が生じることになる。それは人口の過密状態のことで，街は人で溢れかえり窮屈なものになっていた。特に労働者の居住区はスラム化して犯罪の温床となり，住宅環境は極度に悪化した[5)]。

大都市における人口の大部分は労働者など下層市民であるが，彼らの生活は過酷なものだった。工場労働者の就業時間は一日16時間で，週単位で見ると90時間の長さになる。労働環境も劣悪で，負傷・死亡事故が頻発していた[6)]。労働者の置かれた環境の厳しさは職場だけではなく，家庭においても同様だった。労働者が住む地区には背の高い建物がひしめきあい，その間を縫うように狭くて暗い小路が延びていた。労働者たちは，その道の両側に並ぶアパートに暮らしていた。その居住空間は快適というにはほど遠く，陽のあたらない部屋は極めて不衛生なものだった。そのうえ，家族全員が一つきりの部屋に押し込まれ

労働者居住区

るように暮らしていた[7]。危険な職場と不潔な住居，それが労働者の日常空間だった。彼らの慰めといえば安酒と煙草ぐらいのもので，産業化が進んで経済格差が広がると，更にアルコールとニコチンへの依存度は増していった。しかし，それでは真の安らぎを得られるはずもなく，労働者たちは身体に変調をきたし，なかには精神を病んでしまう人もいた。

このように，世紀の転換期におけるドイツでは，国民の多くにとって健康を維持することは難しくなっていた。近代化は，物質的な豊かさと便利な生活を創出するという意味で肯定的に捉えることができる。しかし，反面で人は単なる労働力としての価値しか持てなくなり，結果として近代社会は人間疎外という深刻な問題を孕んでいた。このような非人間的な生活が常態化していくと，国民のあいだに危機感が芽生えていった。そこで，疲弊した人々を救うための方策が求められるようになり，近代社会へのアンチテーゼとして，人間性の回復を求める運動が開始される。

2　ドイツ第二帝政下における裸体主義の萌芽

人間が疎外されていく状況を目の当たりにして，生活を改革しようと立ち上がる人々が現れた。社会学・哲学・医学など各分野で，人間らしい生活を取り戻そうとする思想運動が開始されたのである。その思想のなかには，大きな二本の柱があった。それは人間性の回復と自然への回帰である。FKK の類義語である「裸体文化」(Nacktkultur) という用語[8]の生みの親であり，医師だった

ハインリヒ・プードルは，1893年の手記でこう述べている。

> 衣服をまとった人間は不健康で不道徳になってしまい，それどころか彼らは生きた屍のように見える。このことは工業化に付随する現象であり，人間は母なる自然に帰依しなければならない。[9)]

彼をはじめとする裸体主義者の主張は，次のようなものだった。近代化された社会に住む人間は太陽の光を浴びることなく，汚染された空気と水を摂取し，窮屈な衣服を纏い，あくせく生活している。このような自然と隔絶された生活は，人間本来の営みからかけ離れたものである。それがもとで，人々は健康を害してしまい，その挙句に精神まで病んでしまった。この悪しき流れを断ち切るためには，生活を改革しなければならない。その具体的な方法として，息のつまる都会から抜け出し，自然のなかでのびのびと過ごす時間を確保することが必要だと考えられた。

そこで，人間疎外を解決するための有効な手段として取り上げられたのが裸体主義だった。その始まりは，19世紀半ばのスイスの物理学者アーノルト・リクリの学説に求められる。彼は自然を利用したセラピーを考案し，日光と空気という自然界の有する力を体内に摂取することにより，健康の回復を実現しようとした。その際に重要なのは，衣服を脱ぐことにある。太陽の光と新鮮な空気を効率よく体内に取り入れるためには，できる限り衣服を着用しない方が良いと考えられたからだった。[10)] この自然の治癒力を利用する裸体健康法は，19世紀末頃になって徐々に広まっていく。その流れを汲む裸体主義の思想家たちは，健康増進はもちろんのこと，脱文明社会，人間と自然の再結合までを視野に入れた運動を展開していったのだった。

彼らの思想に共通する点は，おおよそ次のようなものである。病んだ身体を癒すには自然の力を借りることが一番である。大自然が有する治癒力の恩恵に授かるには，まず都会を離れ郊外に赴かなければならない。水辺や野山に行き，

FKK 団体の機関誌『美』

そこで自然界の治癒効果を全身で受けとめ，それによって健康を回復させることができる。そこで大切なのは，全裸になることである。衣服は肉体と外界を隔てるバリアとなり，自然の恵みを摂取するのを妨害してしまうからである。もともと人は裸で生まれるのだから，裸体はいちばん自然な人間の有様である。人は本来あるべき姿に戻って自然に回帰することで，一旦は引き裂かれてしまった自然と再び結合される。それによって，人間性を回復することができるし，ひいては人間疎外からの脱却が実現されると考えられた。

この裸体主義思想は，当時の多くの学者からの賛同を受けた。1903年に創刊された雑誌『美』は裸体主義を紹介する傍ら，この運動を推奨する論説を数多く掲載した。その執筆者には心理学者・科学者・教育学者の名前が連ねられており，学問的な見地から裸体主義を擁護する論陣が張られた。更には，医学と衛生学からの論証も行われ，「裸体主義は分断された肉体と精神を再統合させるものである」との見解が示された[11)]。こうして，裸体主義は科学的根拠に基づく活動として国民に紹介されたのだった。

このあと，『美』の流れを汲む雑誌が続々と発行されていくことになる[12)]。その発行者のひとりに，リヒャルト・ウンゲヴィッターがいる。彼はダーウィンの進化論を援用しつつ独自の論を展開し，近代人は都市と名づけられた石造りの岩屋に住み始めて以来に自然から切り離された生活を送るようになり，それが原因で健康を害してしまったと考えた[13)]。この説に則って刊行された雑誌『再び裸になった人間たち』の反響は大きく，裸体主義の存在は国民に広く認知さ

れるところとなった[14]。それと同時に，裸体主義文化の略称である「FKK」という言葉が知れ渡っていった。このように，裸体主義思想が衆知されたことによって，1898年ノルトライン＝ヴェストファーレン州にある都市エッセンで最初のヌーディスト団体が結成されるに至った[15]。

裸体主義関連の雑誌による宣伝効果もあり，FKKを知る人が増えていったものの，それ以前の裸体主義団体の数はまだ多くなかった。その理由として，裸体主義者は進歩的な考えを持ったエリート層に限定されていたことが大きかった。それゆえ，当初のFKK団体は局所的なものに留まっていたのだった。ところが，いまや裸体主義者たちが増えていくと，その受け皿が求められるようになった。つまり，FKK団体の全国レベルでの組織化という課題が浮かび上がったのである。実際にウンゲヴィッターのもとには，雑誌読者から統一的な国内団体を設立して欲しいとの嘆願書が届けられた[16]。

そこで，裸体思想を実践するための体制づくりが始まる。1904年マックス・フェルディナント・ゼーバルトがベルリンにFKK団体「ヌード ナツィオ」を発足させると，そのあとの13年までに，ドイツ国内における団体数は50を超えるまでに増加した[17]。このように組織化が進むなか，注目すべき出来事が起こっている。06年に裸体主義者たちはドイツ国内だけに目を向けるのではなく，国外までも視野に入れた国際的なFKK団体の設立を求める声明を発表した。また，09年に設立されたFKK団体「フライア」は，ドイツで最初に公的団体として役所に登記された[18]。

ここで，当時の社会背景に目を転じてみる。この頃のドイツの国家体制はまだ帝政を保持していたので，封建的な色合いが強く残っていた。それゆえ，裸体主義の賛同者は増えていったが，他方でこの新しい文化運動に抵抗を感じる人もいた。特に保守的な人たちは，公の場で裸になることは破廉恥で反道徳な行為であるとして，FKK運動に反対の態度を示した。そのためドイツ各地にあるビーチのなかには，裸になることは公序良俗に反するとの理由でヌードが禁止される場所があった。当時の社会は，ウンゲヴィッターの「ヌードをいや

らしい目で見るのは堕落した人間だけだ」という意見に耳を傾けるほど先進的ではなかったということである。[19)]

裸体主義文化は第二帝政下で広まりつつあったとは言え，国民的な支持を受けたとは言い難い状況だった。裸体主義が広く受容されるのは，その後の帝政末期からヴァイマル共和国時代にかけてのことになる。

3　ヴァイマル共和国と裸体主義の開花

裸体主義文化が受け入れられていく背景には，大都市化による不健康な生活と近代化による人間疎外があった。それに加えて，ドイツは1914年から始まる歴史的な事件に遭遇して，更なる重荷を背負うことになる。それはヨーロッパ全土を揺るがした第一次世界大戦と，敗戦による賠償のことを指す。ドイツ国民が戦中の困難と戦後の補償問題で苦しんでいた時期に，ヴァイマル共和国は誕生する。

1919年にヴァイマル政府が発足すると，ドイツの政治体制は帝政から民主制に移行した。この変化は極めて重要なことである。なぜなら，国家体制が新しいものに生まれ変わることのなかには，国内に漂う過去の封建的で保守的な雰囲気が刷新される可能性が秘められているからである。実際に新しい国家の下では，それまで支配的だった価値観が揺らいで，革新的な考え方が取り入れられようになった。たとえば，公民権や労働者の権利を求める市民運動が盛り上がりを見せたし，これまで顧みられることのなかった女性の権利にも焦点が当てられることになった。性の領域でも，大きな変化が訪れた。性行為は子孫繁栄を目的とする営みであるべきだとしてきた旧来の考え方に対して，男女が平等に楽しむための愛情行為のひとつだと位置づける新しい解釈が提示された。[20)] ヴァイマル時代には性に関する考え方が変化し，処女性はもはや結婚の前提条件ではなくなり，婚姻外の性が公認されるようになる。[21)] この動きは，男尊女卑といった過去の因習を打破して，男女同権を実現しようとする女性解放運動に

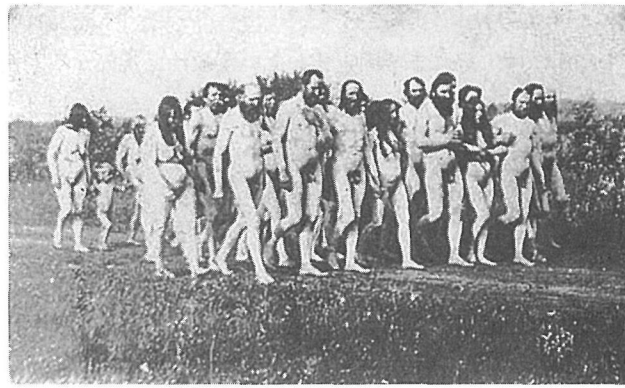
繋がるものだと言えよう。

ヴァイマル時代には，それまで固定化していた政治と規範が不安定になり，社会風潮までが揺らいだ。この時期にみられるような時代の動揺は，人々の価値観を変化させていくものである。そして，この価値観の転換こそが新しい文化を創造し受容する土台を構築する。裸体主義文化は，そのような土壌で生育していくのだった。

大戦を経験したことで，ドイツ国民は肉体的にも精神的にも疲弊していた。そのうえ，彼らの生活は未曾有のインフレによって困窮を極めた。そこで，国民が元気を取り戻すための有効な方策を求める機運が高まり，そのことが裸体主義文化の拡大を呼び込んだ。なぜなら，裸体主義思想は人間と自然の調和を唱え，肉体のみならず精神をも健康にすることを活動目標に入れていたことが大きく作用したからだった。

この頃の裸体主義運動を牽引していた人に，教育学者で医師でもあるアドルフ・コッホがいる。彼は1922年にベルリンで「FKK父母会」という同好会を作り，裸体主義文化の普及に尽力していた。コッホによると，現下の混迷状態は人間がみずから作り出した文明によって生じたもので，それは機械化された巨大産業の負の遺産であり，人間は自我に目覚めて自信を持つことで人間疎外に対抗できるとされた[22)]。また，彼が設立したFKK団体の理念には，他人に対する愛情と互助精神が盛り込まれ，反戦の立場が尊重された。都市に暮らす人々のあいだでは，息苦しい都会から抜け出して自然のなかで過ごすことによって日常のストレスを発散させたい気分が膨らんでいた。そのような欲求に応えてくれる組織がコッホに代表されるFKK団体であり，裸体主義の存在感は以前にも増して高まっていった。そこで，多くの国民が裸体主義運動に参加するようになる。

北海沿岸にフュジアという名称の島があり，それはフリースラント諸島のなかにある最大の島で，現在はドイツのニーダーザクセン州に属している。この島に，1920年以降で最初の公のヌーディストビーチが誕生した。これを皮切り



ハイキングをする裸体主義者たち

に，裸体主義者のための専用ビーチが次々と誕生していった。このような活動場所は海岸に限らず，郊外の自然に恵まれた場所にも設置された。たとえば，ベルリン郊外南部に位置するモツェナー湖の北岸にFKKの活動地区が設けられて，そこは「メルヒェン草原」と呼ばれていた。ここは，裸体主義者たちが自由に使用できるようにと，個人的に購入された土地だった。

裸体主義文化の実践活動とは，具体的にどのようなものだったのだろうか。ヌーディストと言えば，ビーチが連想されることだろう。上述のように，ヌーディストビーチはドイツ各地に点在していたが，そのような場所は海岸のみならず，河川と湖沼のほとりにも設けられていた。裸体主義者たちは，そこでのんびりと日光浴をしたり水浴をしたり，あるいは球技をしたりして楽しんでいた。

彼らの活動場所は，水辺に限られたことではなかった。山と森でもFKK活動は行われており，静かに森林浴をする人もいれば，活発にハイキングをする人もいた。野原では，ダンスや体操など団体競技が実施されていた。なかでも体操は初期の頃から取り入れられており，これはドイツで「体操の父」と呼ばれるフリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーンの思想を継ぐものだった。[23] 他にも，田園地帯の道ではサイクリングと乗馬をするヌーディストの姿があった。野外

の自然に囲まれた場所では，キャンプをするグループもあった。驚くべきことに，FKK活動は冬期でさえ継続されていた[24]。スキーやスケートなどウインタースポーツ関連の行事が開催されており，当然のことながら参加者は全裸だった。

これらのFKKの活動に共通する点は，いずれも衣服を着用しないこと，自然のなかで行われること，男女年齢の区別なく共同で参加する形態を取ることだった。この緩やかな条件のもと，裸体主義者たちはスポーツとレクリエーション活動に興じていた。

このような謂わば動的なFKK活動と並行して，やがてより静的な活動が実践されていくことになる。最初は，癒し効果を持つリラクゼーション活動だった。ヌーディストたちは自然のなかに身を横たえて，太陽の光，新鮮な空気，澄んだ水など自然のエッセンスを体内に摂取しながら憩い，心の平穏を得ようとした。これが更にすすんで精神面に比重を置くようになると，ヨガを取り入れた活動を行うFKK団体が出現する。ヨガは自分の内なる再生能力を目覚めさせるものだと考えられていたからだった。自然療法医で仏教徒でもあるカール・シュトリュンクマン博士は，ヨガは「肉体及び精神と魂の完全なる再生を実現するものである」として，その実践を推奨した[25]。その進化した形が，オットー・ハーニッシュが設立したFKK団体だった[26]。その活動内容はヨガと共通してはいるが，ゾロアスター教とキリスト教の教義を基盤に考案された宗教色の強いもので，呼吸法と菜食によるダイエットなど独特な健康法を実践した[27]。

FKK活動と一言で言っても，その活動内容は多岐にわたる。初期のFKK活動の種類は単なる水浴と日光浴だったが，次の段階では種々のスポーツ・ワンダーフォーゲル・キャンプなどに拡大し，やがて瞑想を取り入れるようになった。このように，裸体主義団体の活動は多様化していった。

裸体主義思想に基づく文化運動は多くの国民から支持を受けたので，参加規模は膨らんでいった。ドイツで全裸の人を見かけることは，もはや珍しい風景ではなくなった。その結果，各自治体はFKK活動を許容する姿勢に転じてい

った。[28] 裸体主義は1930年代に一気に広がりを見せ，参加者は10万人を超えていた。また各地でFKK主催のイベントが開催されるようになり，31年5月ライプツィヒで水泳競技大会が開かれたし，39年8月ドイツ国内でヌーディストによるオリンピックのような国際大会が催された。この時期に，裸体主義文化はひとつの頂点を迎えたのだった。

4　FKKの受容背景

裸体主義は19世紀末から展開され，20世紀初頭には広範囲に浸透していた。そこで，裸体主義文化がこの時期のドイツで受容された要因について考えていく。

先ず挙げられるのは，人間性の回復である。これまで述べてきたように，産業化は国民の生活を便利にしてくれる一方で人を自然から遠ざけ，単なる歯車のようなちっぽけな存在にした。その結果，人は自信を失い精神不安定な状態に陥った。いわゆる人間性の喪失である。そこで，この問題を解決するために注目されたのが裸体主義だった。FKK団体は人間と自然との調和，それによって身体と精神の均衡を取り戻そうする活動をしていたからである。

次に指摘されるのは，近代人の健康志向である。FKKが実践していた健康法はスポーツとリラクゼーション以外に，反ニコチンと反アルコール，それに菜食主義があった。裸体主義者は煙草と酒をいっさい摂取しない生活を実践しており，ベジタリアンが多くいた。更には，食物を栽培する畑の土にまで配慮していた。そのような生活スタイルが多くの人たちから支持されたのだった。

> 裸体主義運動は，ドイツにおける広汎な「生活改良」運動の一部であった。「生活改良」運動は，いわゆる真の生命力を回復しようという試みであり，菜食主義や反アルコール主義，自然療法，土壌改良，田園都市の提唱などによって人間と社会を刷新しようとしていた。都会は風俗壊乱と道徳荒廃

の温床として糾弾され，肉体的疾病ほか［…］あらゆる問題を引き起こす原因とされた。[29)]

裸体主義者は生活を改革するために，科学的な健康法を追求していた。そのような姿勢は国民の健康志向に適合しており，それゆえ裸体主義文化はドイツ国民に浸透していった。

その他の裸体主義の拡大要因としては，当時の政治体制が挙げられる。大戦後にヴァイマル共和国が誕生すると，ドイツの政治形態は帝政から議会制民主主義政治へ移行した。新政府は，主に社会民主党（SPD）・民主党（DDP）・中央党（Zentrum）などの左派政党から構成されていた。これらの政党は，かつてのドイツ帝国では排除すべき異分子だとして抑圧されていたものだった。それらの政党がいまや政権を担うことになると，国民議会はヴァイマル憲法を成立させて，帝政下では認められていなかった団結権・国民投票・国民請求などの基本権を国民に保証した。また，女性に参政権が付与された史実は記憶されるべきである。

社会民主党は政府内で最大勢力を誇り，その発言力は大きかった。この党は労働組合と密接な関係にあり，労働組合出身の議員が議員総数における4割近くを占めていたので，労働者を保護する立場をとった。そこで，社会民主党は戦前には限られた人しか参加できなかった文化団体を，労働者も参加できるものに再編しようとした。また，ヴァイマル政府は「生活改革」（Lebensreform）をモットーを掲げて，国民の生活をより良いものに改革するために，スポーツなど有意義な余暇活動を行うことを文化団体に求めた。そこで，利用されたのがFKK団体だった。この団体は健全な余暇活動を実践するものであったので，政府の意向に沿っていたからである。社会民主主義者たちは「国民健康同盟」を設立して，労働者階級が参加できる裸体主義団体の組織化に向けて動き出した。この同盟は自らを「自由人たちのグループ」と称し，労働者によるＦＫＫ団体の上部組織になった。これによって，それまで個別に活動して

いたFKK団体が整備されていった。他にも，共産党が独自のFKK団体を設立して活動していた。ヴァイマル政府は国民の健康を回復させ，再び労働できる体力づくりをさせるためにFKK団体を利用した。それによって，裸体主義は国民にいっそう定着していくことになった。

この時期の文化の変遷のひとつに，帝政時代における貴族・高級市民層などエリート中心のハイカルチャーから大衆文化へ移行したことが指摘される。当初のFKK団体は小規模なサークルで，メンバーは社会階層の上層に位置する少数派に限定されていた。しかし，時代の経過とともに，団体構成員は労働者階級にまで広がった。それによって，FKKの参加者が急増して，裸体主義団体は各地に設置されていった。

ヴァイマル政府は労働者保護を目的にした諸政策を打ち出したが，そのひとつに労働時間の短縮があった。1日の労働時間が8時間に制限されたことによって，国民に余暇活動を楽しむ余裕が生まれた。裸体主義文化を担う主体者が特権階級から大衆に代わるのには，FKK団体が政府の後押しを受けたことが大きく影響している。そして，裸体主義文化はヴァイマル共和国で大きく進展したのだった。

5　ジェンダーとFKK

第二帝政期からヴァイマル時代にいたる特徴のひとつに，女性の権利の向上が挙げられる。政治的な分野では女性の参政権が認められたことに加えて，性の分野では性交渉における女性側の権利の尊重が唱えられたことは，既に言及した通りである（「3　ヴァイマル共和国と裸体主義の開花」の冒頭部）。他にもヴァイマル憲法の成立によって，男女同権がドイツで初めて認められた。国民の半分は女性であるという大雑把な見方をするなら，女性の存在を抜きにして裸体文化の発展を語ることはできないだろう。ここでは，女性と裸体主義運動の接点について考察していく。

帝政下では，ドイツの家庭は男性を中心とする家父長制度が規範になっていた。家父長制度は，1794年に制定されたプロイセン一般ラント法のなかにある家族法で明文化されている。この法律では，家庭内の決定権は夫にあること（184条），妻の財産は夫が管理すること（205条）など男性優位に基づく法的立場が提示されている[30]。帝政期の女性は男性に従い，家の中にいて家庭を守る義務が課せられていた。また，理想とされる女性像は良妻賢母型だった。

20世紀に入って間もなく，女性の社会進出が本格的に開始される。その理由は，第一次世界大戦にあった。女性は出征した男性の代わりに働きに出て，男性の職場に登場したからである。1914年にドイツ婦人団体連合会長ゲルトルート・ボイマーは「婦人国民奉仕団」を発足させ，女性は社会に進出して男性の職業を担うべきだと主張した[31]。そうして，帝政末期の女性たちは男性と同等に働く能力があることを自ら証明してみせた。間もなくヴァイマル時代になると，そこへタイピスト・秘書・デパート販売員など女性専門職が出現する。これらのホワイトカラーと呼ばれる職業の女性就労者数は150万人に達し，働く女性の急増は女性の社会進出の象徴だとされた[32]。帝政末期には，第一波フェミニズム[33]の流れが押し寄せて，「男は外に，女は家に」という図式は成立しなくなっていた。それに続くヴァイマル期においては，19年に婦人団体連合の会員数は88万人に達し，女性運動が一定の成果を獲得した時代だと言われる[34]。

女性解放運動の広がりにおいても，政党の果たした役割は大きかった。ドイツ社会民主党は女性の参政権と労働権を主張し，民主党は「婚姻は，両性の同権を基礎とする」という文言をヴァイマル憲法に入れるように働きかけた。そのような動きを受けて，1922年に法律専門職に女性が就くことを認める法律が成立した[35]。この成果に見られるように，女性を取り巻く社会の変化と女性の権利の向上によって，ヴァイマル時代には精神的にも経済的にも男性に依存しない女性が現れてきた。この頃，「新しい女」（Die neue Frau）という言葉がマスコミを賑わし，自立した女性という新しいドイツの女性像が確立されていく。それによって，結婚が女性にとっての幸せだとする価値観はくずれ，未婚率と

離婚率が上昇した。また女性の性意識は開放的になり，性の分野でも男女同権化が進んだ。

> 男性が前線に召集されたあいだに女性は経済的・精神的に自立し，さらにダンスホールで自分の方から男性に声をかけて享楽的な時を過ごすなど，性的にももはや男性の要求に従うだけの受け身的な存在ではなくなった。このような変化が生じるなかで，戦前の家父長的な家族像は衰退し，[…]代わって登場したのは解放された現代的な女性像であり，この新しい女性がジャーナリズムの世界を賑わすことになった。[36)]

女性就業者が増加した時期に，ウィークデイは働き週末は休むという生活様式が一般化していった。週末の余暇活動への関心が高まり，1927年にはベルリンで週末の過ごし方をテーマにした大博覧会が開かれた。そこでは，仕事で疲れた人たちが週末になると自然を求めて遠出する余暇の過ごし方が紹介された。[37)] 29年に公開されたドイツ映画に，ロバート・シオマドク監督の『日曜日の人々』がある。このセミドキュメンタリー映画のなかに，ベルリンで働く若い男女が週末にヴァン湖に出かけて余暇を楽しむ実際の姿が切り取られている。確かに，この映画が上映される以前の08年には，ヴァン湖にヨーロッパで初めて男女混浴の水浴場が設置されていた。[38)] この映画のシーンにあるような週末の余暇を楽しむ生活スタイルは，当時の若い女性たちの憧れだった。

ヴァイマル期では労働者の権利が認められていったが，同時に女性の権利にも目が向けられた。それに応じて，文化団体の在り方も変化していく。既存の文化団体に所属できるのは男性に限定されており，女性には許されないのが通例だった。また，スポーツの分野でも性差別があり，もともとスポーツは男性が行うものとされていた。[39)] 特に，ボート・自転車等は女性に不相応とする偏見が横行していた。ところが，FKK 団体への参加は男性と同様に女性にも許されており，多くの女性たちが参加した。それに，FKK 団体が主催するスポー

ツに男女差別は存在しなかったので，女性は男性がするどんなスポーツにも加わることができた。裸体主義の活動では，性による分け隔てがなく，男女が共同であらゆるスポーツに興じていたのだった。そんなFKK団体のひとつに「ドイツ肉体規律同盟」があった。この団体が発行していた1930年の機関誌には，裸体の男女が一緒になって運動している写真が多数掲載されている。そのなかの一枚に，ボート漕ぎをする裸婦の姿を認めることができる。[40)]

ボートを楽しむ裸の女性

女性を裸体主義に接近させた人物に，女医で教師でもあるベス・メンゼンディークの名前が挙げられる。彼女は身体と精神は一体で発達するとして，裸体主義を取り入れた女性教育を行った。メンゼンディークは，裸になることは女性が自分自身の身体への意識を集中するのに有効であると考えたのだった。[41)] ミュンヘンで発行された彼女の著書『女性の裸体文化』は版を重ねられて，多くの女性がこれを読んだ。

女性の自立が可能な社会が到来すると，女性は自分たちを束縛する古い社会規範を振りはらい，自由になろうとした。現在の立場からすれば，当時の女性の権利への理解は未成熟なもので，「新しい女性」さえも旧来の女性像を覆すには至らなかったとされる。[42)] 確かに女性が活躍できる公の場は少なかったが，それでも女性が男性と同等に活動できる場所は存在しており，そのひとつがFKK団体だった。裸体主義思想では，裸体は男女平等を意味するが，それゆえに女性たちは臆することなくFKK活動に参加できた。そして，彼女たちは裸体主義文化の担い手となり，その発展に貢献したのだった。

6　服飾文化と裸体文化

第二帝政時代からヴァイマル共和国時代を通じて，ドイツの社会状況はめまぐるしく変化していった。それと同様に，ファッションも大きく変化する。ファッションは時代を映す鏡だと言われるが，服飾文化に視点を向けることはこの時代を読み解く手がかりになる。ここでは，モードの変遷を追いながら当時を生きた人たち，特に女性たちが置かれていた状況を明らかにしたい。

1890年から1914年までの婦人服のモードは，ジャック・ドゥーセとジャンヌ・ランヴァンらフランスのデザイナーに代表されるように，曲線的で有機的なＳ字型のシルエットを形成するドレスだった。[43)]

> Ｓ字型シルエットとは，前方に突き出した豊かな胸と後方に張り出した腰にはさまれた，極端に細いウエストが強調される「Ｓ」字に似たドレスを指す。このころには，細いウエストを形づくるためのさまざまなコルセットが下着メーカーによって開発され，Ｓ字型ドレスの普及に大きく貢献した。[44)]

第二帝政期では，女性はウエストを締め上げたドレスを着用するのが普通だった。そして，この種のドレスを着るために，女性たちはウエストを極端に締め上げるコルセットを装着しなければならなかった。

このような服飾文化が流行していたわけだが，しかし他方でこの服装に反発する人たちがいた。なぜなら，この種のドレスは女性の自然な身体のラインからかけ離れており，極端なまでに絞られたウエストは奇異なまでに人工的だったからである。そこで，新しいファッションが誕生していく。服飾デザイナーたちは不自然な服装をやめて，身体のあるがままの美しさを取り戻そうとした。その動きは，まず私的な空間ではじまった。女性たちは公の場所では身体を締め付けるドレスを着用しつつも，自宅では緩やかな部屋着を纏っていた。[45)] やがて，それが公の場でもコルセットを使わない服装に変化する。[46)]

フランスのファッションデザイナーであるポール・ポワレは，1906年に「ローラ・モンテス」というコルセットを使わないハイ・ウエストのドレスを発表した[47]。このモードは，やがてコルセットを使わない服飾文化を生み出した。それによって，20年代のドイツに「新しい女性」像とそれに合致した服飾文化が誕生した[48]。この流行の影には，戦争があったことは指摘されなくてはならない。女性は後方支援にかりだされたので，女性服は動きやすい男性的な服装に近づいていった。その結果，スカートの丈は短くなり，胸と腰のふくらみを控えめにしたボーイッシュ・スタイルが流行した[49]。第一次世界大戦は，ファッションにも多大な影響を及ぼしたのだった。

自然な身体の姿

人工的な姿

女性解放が叫ばれる時代において，コルセットが消滅していくのは象徴的な出来事である。つまり，女性の身体を締め付けるコルセットは女性の自由を奪う社会と因習を表現するものであり，女性を抑圧する象徴だと見なされていた。それゆえ，コルセットからの解放は女性解放と同義だと言える。このような動きとFKKは無縁ではない。衣服がもたらす束縛からの解放の究極的な形態は，衣服そのものを脱ぎ捨てることである。そのような行為が許される公の場所は，FKK活動以外に存在しなかった。裸体主義によれば，裸でいることは着飾らないことであり，それは人類の平等を意味していた。FKK活動の場所では，女性たちは性差別を助長する衣服をすべて脱ぎ去って解放されたのだった。

紳士服は婦人服が大きく変化するのとは対照的に，ほとんど変化しなかった。変わった点といえば，せいぜいジャケットの丈とズボンの幅，それにネクタイ

の結び方くらいのものだった。社交界では，男性は一様に白いシャツに黒の燕尾服とフロックコートをまとっていた。しかし，男性にとっての衣服は，女性にとってと同様に束縛するものであることに変わりはなかった。燕尾服は勤労のしるしであり，若者の立身出世や野心を暗示していた[50]。息苦しいスーツとネクタイ，あるいは仕事着を脱いで全裸になることは，ストレスに満ちた都会生活に別れを告げるばかりか，服装に付随する階級差別を排除する意思表示でもあった。19世紀以降の社会では，各職業に制服が課せられるようになっていった[51]。それによって，管理体制が衣服を通して身体へ支配力を及ぼしたとされる[52]。それゆえ，裸体は男性にとっても社会的束縛と階級差別からの解放という意味を持っていた。裸体主義によれば，服を脱ぐ行為は近代社会によって貼られたレッテルを取り去ることでもあったのだから[53]。

FKK の理念には社会的なメッセージが付与されており，全裸であることは隠していない，秘密を持たない状態を表している。身体を隠す衣服を身につけないことは，心に隠すものがないことを意味しており，全裸は真実を語るものだと解釈された[54]。ヌーディストにとって，裸体主義は差別のない社会を実現するものでもあったのである。

結

これまで見てきたように，裸体主義には明確な理念が存在していた。ヌードになることは享楽的な遊戯ではないし，単なる性的嗜好でもない。裸体主義とは，近代化がもたらした人間疎外へのアンチテーゼだった。その主張は，人間性の回復と自然への回帰，人間と自然との調和という理想を掲げたひとつの思想だった。

しかし，いくら高尚な理念を掲げた文化活動であっても，参加者がいないと発展は期待できない。それが実現するのは，ドイツ帝国崩壊後のヴァイマル共和国下のことだった。政府は FKK 団体に余暇活動を引き受ける役割を求めた[55]。

謂わば，政府公認の活動になったわけである。同時に，アルコールとニコチンにまみれた労働者の生活を健康的なものにする生活改革を実行する役目も担わせた[56]。それによって，多くの国民が余暇を楽しむためにFKK活動に参加した。当時の労働者保護の政策は，裸体主義文化の拡大に追い風となったわけである。こうして，第二帝政期に萌芽した裸体主義は，次のヴァイマル時代に大きく開花したのだった。

また，この時代の余暇活動は多様化していた。人々は映画を観に出かけたり[57]，酒場やダンスホールで酒を飲みながらジャズに耳を傾けたり，チャールストンなど流行りのダンスを踊った[58]。これらの娯楽に共通するのは，街中で楽しむ都会的な遊びであり，自然とは縁遠いという点である。それゆえ，都会の遊びは不健康で，酒に溺れた男女が戯れる姿から不健全だと見る向きもあった。実際に，この後に続くナチス時代では，ジャズは退廃的音楽との理由で禁止された。裸体主義の文化活動は，そのような都会的な楽しみとは対極をなすものである。FKK活動は高カロリーのアルコール類を摂取する娯楽よりも健康的で，そのうえ引き締まった身体を手に入れることができる。裸体主義者たちは，肉体美を追求する人たちでもあった[59]。

裸体主義文化が発展する要因には女性の存在があった。FKK活動の拡大には，女性の社会進出を抜きにして語れない。「コルセットからの解放」に象徴される女性解放運動は，第二帝政末頃からヴァイマル期に本格化する。コルセットを外すことは，社会的抑圧からの女性の解放を意味することは本論で述べた。ところが，コルセットは身体を締め付けるだけでなく，それを装着すると身体を動かすことはままならず，日常生活を送るだけでも骨が折れたらしい[60]。このファッションスタイルは女性を精神的にも肉体的にも抑圧していたということになる。この時期にココ・シャネルによってジャージー仕様の女性ファッションが考案されたが，それは単なる偶然ではなく，より動きやすい女性服が求められていた社会背景があった[61]。しかし，身体の自由が効く究極の姿は裸体である。裸体主義のもとでは，女性は身体を束縛するものを脱ぎ捨て，肉体も

精神も自由になれた。それゆえ，FKKは女性解放のための文化運動になっていたとも言えるだろう。

そのほか，裸体主義の思想家たちはFKKを児童教育にも利用した。アドルフ・コッホは衛生学と栄養学の観点から，陽の射さない住居に暮らす労働者家庭の子どもたちに裸体主義を役立てようとした。[62] 彼は学校教育に裸体体操を取り入れる一方で，労働者家庭には家族全員でFKK活動に参加するように求めた。このように，FKK主催の余暇活動に参加するのには，老若男女の違いが問われることはなかった。このことは日本における体育の日に通じるものであり，国民参加型の形態は裸体主義文化の拡大に寄与した。こうして裸体主義は社会全体に受け入れられて，ドイツでひとつの文化に成長していった。

ヴァイマル時代が終わりを告げる頃のこと，それは同時にナチスが台頭する時期に重なるが，裸体主義文化は新しい展開を見せることになる。その過程についての考察は，別の機会に譲りたい。

註

1) ドイツ語では「Naturismus」という呼称が使われることもあるので，自然主義を意味する「Naturalismus」と混同しないように留意されたい。英語でも「Nudism」，あるいは「Naturism」の呼称が使用されており，「Naturalism」とは区別される。

2) Oliver KÖNIG: *Die Nacktheit beim Baden,* In: Michael GRISKO (Hrsg.), *Freikörperkultur und Lebenswelt, Studien zur Vor- und Frühgeschichte der Freikörperkultur in Deutschland,* Kassel 1999, S. 43.

3) 木谷勤，望月幸男編著『ドイツ近代史』（ミネルヴァ書房　1993年）65ページ。

4) 同前　123ページ。

5) ヴァイマル政府が労働者の住宅改善に取り組み始めるのは，ようやく1920年代後半になってのことである。それでも，国家助成で建設された住宅に入居できたのは，当初は特権的な労働者に限られていた。

6) Jürgen REULECKE: *Vom Wiener Kongress bis zum Beginn des ersten Weltkriegs (1814-1914),* In: Ulf DIRLMEIER (Hrsg.), *Deutsche Geschichte,* Stuttgart 1999, S. 255.

7) Ulrich LINSE: *Zeitbild Jahrhundertwende,* In: Michael ANDRITYKZ und Thomas RAUTENBERG (Hrsg.), *»Wir sind nackt und nennen uns Du« Von*

Lichtfreunden und Sonnenkämpfern, Eine Geschichte der Freikörperkultur, Gießen 1989, S. 26f.

8) 初期の裸体主義運動では，裸体主義文化を表す用語はいくつか並存していた。その後にFKKという言葉が定着して，主に使用されるようになる。

9) Horst W. ROHLS: *Berlin um 1900, Anfänge der Arbeiterfreizeit, Mitteilungen aus der kulturwissenschaftlichen Forschung,* Nr.21, Berlin 1987, S. 93f.

10) Uwe SCHNEIDER: *Nacktkultur im Kaiserreich,* In: Michael GRISKO, a. a. O., S. 69.

11) ibid, S. 94.

12) Andreas KUNTZ-STAHL (Hrsg.): *Vom Naturismus zum Nudismus — Internationale FKK-Bibliothek Kassel, Bestandsverzeichnis,* Frankfurt 1985, S. 17f.

13) Ulf Erdmann ZIEGLER: *Nackt unter Nackten, Utopien der Nacktkultur 1906-1942,* Berlin 1992, S. 12.

14) この雑誌は，創刊後数年で約10万部を売上げるまでになった。その後，ウンゲヴィッターは『裸体』という題名の著書を06年に出版するが，出版差し止めの判決を受けた。

15) Horst W. ROHLS: a. a. O., S. 93.

16) ウンゲヴィッター自身は裸体主義運動の目的を生活改善に置いておらず，人種的な見地からFKKを民族浄化運動として捉えていたので，嘆願書に応答することはなかった。

17) Horst W. ROHLS: a. a. O., S. 94.

18) ibid, S. 94.

19) Hans Peter DUERR: *Nacktheit und Scham, Der Mythos vom Zivilisationsprozeß,* Frankfurt a. M. 1988, S. 150.

20) Kristine von SODEN: *»§218 — streichen, nicht ändern!«; Abtreibung und Geburtenregelung in der Weimarer Repubrik,* In: Gisela STAUPE (Hrsg.), *Unter anderen Umständen,* Dresden 1993, S. 48. 中絶手術を行うことは法律（第218条）で禁じられており，これに違反した医師と女性は処罰された。一方で，男性は罪に問われることはなかった。ヴァイマル共和国時代になると，性についての意識変革が起こり，反218条の運動が展開された。

21) 木谷勤，望月幸男編著　同掲書　132ページ。

22) コッホが生活改革の視野に入れていた対象は，主に社会の底辺にいる労働者たちだった。彼は労働者たちの生活改革と同時に，彼らの政治参加を促して社会改革も目指していた。

23) Oliver KÖNIG: a. a. O., S. 60.

24) Maren MÖHRING: *Marmorleiber, Körperbildung in der deutschen Nacktkultur (1890-1930),* Köln 2004, S. 59.

25) Bernd WEDERMEZER-KOLWE: *Der neue Mensch, Körperkultur im Kaiserreich und in der Weimarer Republik,* Würzburg 2004, S. 150.

26) この団体はツァラトゥストラ（ザラスシュトラ）の教義「マスダスナン」を基礎にして考案された思想の実践を目的に設立されたものである。

27) Bernd WEDERMEZER-KOLWE: a. a. O., S. 153. ハーニッシュは1890年代にシカゴを拠点に活動していた。彼が設立した団体は，19世紀末のアメリカ合衆国で活動を開始し，その後20世紀初頭にヨーロッパへ伝播した。ドイツで活発化するのは，1930年代以降のことである。しかし，35年にナチスによって活動を禁止されて，41年には駆逐された。なお，現在のドイツでは活動が再開されており，参加者は数千人程度いる。

28) 裸体主義活動が認知される以前は，「FKK 禁止」と書かれた看板を海岸の入口付近に立て，裸体活動を許可しない自治体があった。それと並行して，FKK に対して寛容な態度を示す自治体もあった。そのような自治体では，ビーチをヌーディスト向けと一般向けの区画に分けて容認していた。

29) ジョージ・L・モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』佐藤拓己，佐藤八寿子訳（柏書房　1996年）66ページ。

30) 矢野久，アンゼルム・ファウスト編『ドイツ社会史』（有斐閣　2001年）160ページ。

31) 若尾祐司，井上茂子編著『近代ドイツの歴史』（ミネルヴァ書房　2005年）170ページ。

32) 井上洋子他著『ジェンダーの西洋史』（法律文化社　2012年）123ページ。

33) 第一波フェミニズムとは，19世紀後半から1920年代まで行われた参政権など権利獲得を目指した女性運動を指す。第二波フェミニズムは，1960年代からアメリカを中心にして始まった社会経済的女性差別を問題にした女性運動のことを意味する。

34) 矢野久，アンゼルム・ファウスト　同掲書　199-200ページ。

35) 姫岡とし子，川越修編『ドイツ近代史ジェンダー史入門』（青木書店　2009年）48ページ。

36) 木谷勤，望月幸男編著　同掲書　129ページ。

37) 田丸里砂，香川壇編『ベルリンのモダンガール　一九二〇年代を駆け抜けた女たち』（三修社　2004年）19ページ。

38) Oliver KÖNIG: a. a. O., S. 64. この後もヴァン湖周辺に複数の水浴場が設置されて，ベルリンはヨーロッパのなかで独自の水浴文化を形成していった。第一次世

界大戦以降には，それらの水浴場は労働者の家族連れで賑わった。

39）Thomas NIPPERDEY: *Deutsche Geschichte 1866-1918,* Bd.I, *Arbeitswelt und Bürgergeist,* München 1998, S. 174. 1890年代に体操など限られた種類だけ，女性のスポーツ参加が認められた。しかし，それに参加できたのは中流階層より上部に属する女性のみで，労働者階級の女性がスポーツ活動に参加することはなかった。

40）Karl BÜCKMANN: *In Natur und Sonne, von der Sünde gegen die Natur,* Bochum 2011, 付録図版。

41）Karl TOEPFER: *Deutsche Nacktkultur und Erziehungstheorie in den 20er Jahren,* In: Michael GRISKO, a. a. O., S. 182f.

42）田丸美砂『髪を切ってベルリンを駆ける！ ワイマール時代のモダンガール』（フェリスブックス　2010年）171ページ。

43）ドイツでは，この芸術運動はユーゲントシュティール（Jugendstil）という用語が使われており，彫刻，絵画，音楽などの芸術と建築様式などに取り入れられていた。

44）深井晃子『[カラー版] 世界服飾史』（美術出版社　1998年）133ページ。

45）この時期はジャポニズムという服飾文化が流行し，日本の着物に特徴的な開放性が欧米の衣服に採用された。

46）ポール・モラン『獅子座の女 シャネル』秦早穂子訳（文化出版局　1977年）75ページ。コルセットを使わない服装を考案したファッションデザイナーに，ポール・ポワレがいる。彼は「近代ファッションの父」と称され，コルセットを使わないモードを考案したことから，女性服の革命者や女性解放者と言われる。その反面で，ポワレのデザインした衣服は過度に女性を装飾するものだとして，彼を批判する意見もあった。

47）深井晃子　同掲書　137-138ページ。

48）フランスでは，この新しい女性像とモードに「ギャルソンヌ」という呼称が使われる。また，同時期の日本の若い女性は「モガ（モダンガールの略称）」と呼ばれた。

49）能澤慧子（監修）『世界服飾史のすべてがわかる本』（ナツメ社　2012年）137ページ。

50）徳井淑子（監修）『図説 ヨーロッパの服飾史』（河出書房新社　2010年）41ページ。

51）ジョアン・フィンケルシュタイン『ファッションの文化社会学』成実弘至訳（せりか書房　1998年）123ページ。

52）ミシェル・フーコー『監獄の誕生―監視と処罰』田村俶訳（大進堂　1977年）

53) Ulf Erdmann ZIEGLER: a. a. O., S. 7.

54) Horst W. ROHLS: a. a. O., S. 97.

55) この頃,「社会主義生活改革者」(Sozialistische Lebensreformer) と名乗る団体が活動していた。彼らの計画にはFKK活動の目標のなかに「生活改革」が補足されており,労働者に自己解放と生存環境を獲得させようとする活動が試みられた。

56) 社会民主主義者の一派の「自由人たちのグループ」(Die Gruppe freier Menschen) は,FKK運動によって肉体だけではなく頭脳をも鍛錬して,それによって労働者を階級闘争に参加させようと考えた。つまり,FKKを労働運動に利用しようと考えたのである。

57) ヴァイマル時代にはドイツ国内の映画館の総数は5,000を超えており,多くの観客を集めた。また,この時期の映画館は当初の移動式テント型からモダンな建築物へと変化した。

58) 木村靖二『ドイツの歴史 新ヨーロッパ中心国の軌跡』(有斐閣アルマ 2003年) 192-193ページ。

59) Maren MÖHRING: a. a. O., S. 194. 一部の裸体主義者は,スポーツの目的を健康増進の他に,美しいプロポーションを獲得することに置いていた。その際,男性の模範となる肉体はギリシア神話に登場するアポロンで,女性の模範はヴィーナスだった。

60) 能澤慧子『二十世紀モード』(講談社 1994年) 22-23ページ。

61) 他の要因としては,戦時下の物資不足で衣服の材料が手に入らなくなったので,シンプルな服が考案されたという背景があった。

62) Achim FREUDENSTEIN: *Jugenderziehung durch Freikörperkultur,* Hessen 1999, S. 48f. 労働者階級の家庭では,くる病に罹る子どもが多かった。そこで,児童に日光浴を兼ねた体育授業を受けさせる必要性が説かれた。

(本学非常勤講師)
(2013年3月29日受理)